

「ホコリタケ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

ホコリタケというキノコがある。まさしくその名の通り「ほこりまみれ」のキノコだ。



先日、道端で一塊のホコリタケを見つけた。ホコリタケ *Lycoperdon perlatum* は、菌体の内部に胞子を大量に作るので、「腹菌類」(正確には腹菌綱)ホコリタケ科に分類されていた。菌類の系統的研究は目まぐるしく、図鑑を買うたびに分類が変更になっていることもある。現在は、ハラタケ綱、ハラタケ目、ハラタケ科に分類されている。



ホコリタケは1個体ずつ「単生」することが多いが、このように根元がくっついた「束生」で発生することもある。キツネノチャブクロとも俗称もある。



成熟した個体を割ってみると、中から「古綿状」の組織が現れ、その中に大量の胞子が形成されている。こうなる前の若い子実体は、中身が「ハンペン状」で、味噌汁の具にするととてもおいしい。



頭頂部には小さな穴があり、そこから胞子を放出する。指で押すと、煙のように胞子が出てきた。



強く叩くと、一気に胞子煙を放出する。まさに「ホコリタケ」だ。このキノコは、動物に踏まれすことによって胞子の拡散を期待しているのだろう。ホコリタケは他にも「ケムダマ(煙玉)」「チドメダケ(血止茸)」「ポンポンダケ」など、多数ある。